しかし、井上源三郎・山崎丞という古参を含む14名の新選組隊士が命を失った。
こうして、軍隊中枢に戦意が見られない幕軍は、生き残った兵達が舟で淀川を下行して慶喜の待つ大坂城を目指した。
そして、戊辰戦争初戦鳥羽伏見は、幕府の惨敗となる。
しかしその被害は、薩長軍は五千名に対し死者110名、徳川軍一万五千名に対し死者280名と小さくなった。
大軍がぶつかる戦争としては小競り合いという規模で収まる。

●〔慶喜の決断〕

慶応四年一月六日、大坂城御用部屋で控える慶喜の下に、上洛を目指す徳川軍の不利が矢継ぎ早に入る。
その御用部屋の襖外から切迫感を伴った声がした。
会津軍を率い前線から急遽戻ってきた神保修理がかしこまっている。
部屋に入り慶喜の対面に向かい彼は、
「上様……遂に戦が始まり、そして我軍は劣勢に押されております。始まりは、下鳥羽から少し北上した鴨川を渡る小枝橋で砲火が上がりました」
「こちらからは仕掛けるなと念を押しておいた。それは薩摩からだな」
慶喜はあらためて念を押す。
「御意、その通りでございます」
そう聞くと慶喜の顔に赤みが浮いてきて、血が上ってきているのがハッキリ判った。
修理の報告は続く。
「軍団は我が方が敵の三倍に上る兵量なのですが、薩長は少ない軍勢ほぼ全員にミニエー銃を装備しております。対して我が徳川は、シャスポー銃で武装した伝習隊は一千名程と少なく対抗力に劣り、押される次

第となっております。彼等は薩長に勝る技量で良く戦っておりますが、如何せん戦える武力物量差が大きいのは事実でございます。その後は、伏見・鳥羽・千両松と良く耐え忍んでおりますが、押される一方となっております」

“許せん！

西郷（隆盛）や大久保（利通）は世界情勢を知っている筈だ。

清はイギリスにアヘンでもって植民地とされ、メキシコはアメリカに雨霰（あられ）と爆弾を撃ち込まれ国の半分を取られたではないか。

この危機を前に国内で争っている場合ではないのに奴等にこの国を想う心は無いのか……　。

内戦に火蓋を切りおって。

薩長のボンクラ昼行燈（ひるあんどん）に日本を任す訳にはいかん。

徳川の力を思い知らせてやる。”

と彼は陣頭指揮に立ち、大坂城に残る精鋭や中部関東以東に残る幕臣・親幕諸藩、そして大坂湾に控える一月二日に薩摩艦隊を蹴散らした榎本武揚（たけあき）率いる徳川海軍を動員する決意をした。

それに対して薩長は、既に全力で挑んでいるので余力はなかった。

そこには、彼が内戦回避への望みを繋いでいた大久保（利通）・西郷（隆盛）等の国情認識、それが無いという事が証明されてしまった悲しみがあった。

しかし、冷静な筈の慶喜（よしのぶ）の眼が、怒りに燃えていた。

唇が震え、瞳は一点を睨んでいる。

熱い感情が彼を部屋から押し出させ、そして大声で部下達へ命じた。

「皆の者、大広間へ集合せよ！これから薩長への反撃に出る。ワシが陣頭指揮に立ち、徳川の力を薩長に思い知らせ、そして奴等をこの国から一掃する」

すると城全体からウォ～という歓声とエイエイオーという鬨（とき）の声が地鳴りのように響いてきた。

劣勢が伝えられる徳川上洛軍に、中々煮え切らない上様が漸く戦意を現した喜びの声だった。

しかし、慶喜を後ろで見ている修理に、肌に泡が立つ恐怖が走った。
彼は慶喜の前に回り土下座すると、
「上様、今は時ではありません。直々の進言はご容赦してください。もう遅うございます」
涙を流し懸命に慶喜を見つめ、その後の報告を続けた。
「この天下を揺るがす動乱に、徳川か薩長かどちらに味方しようか日和見を決めていた各藩が鳥羽伏見の戦いを見て薩長側に寝返りました。彼等も藩が生き延びる為に仕方ないところもあろうかと察します。それだけならまだしも、徳川の屋台骨となる淀藩稲葉家や彦根藩井伊家も寝返った次第でございます。これまでの戦いでは、近畿に於ける徳川対薩長でしたが、これで完全に日本を二分する内戦となります。そうなると、国は焼け野原となり国力は落ち、これこそ西欧列強が望む“飛んで火にいる夏の虫”状態に陥る事となります。だから、ご容赦を」
修理は深々と額を畳に擦りつけた。
慶喜は振り上げた拳をどうしていいかわからない。
ウォ〜
その口からは、理解できない咆哮が出た。
「修理、俺はどうすればいい！」
間があった。
「血気にはやる家臣達が大広間で準備できる前に舟で密かに城を脱出され、江戸へ東帰されるのが戦闘回避最善策と考えます。そして、これから勃発するやも知れない内戦を治める為に、上様の蟄居恭順にお進みください」
もう冷静に聞いている慶喜は答える。
「それは、薩長へ俺の首を差し出せという事か」
蒼くなった修理は強烈にそれを否定して
「滅相も無い。違います。上様の身にもしもの事があれば、これまで上様が薩長との対決を押さえていた幕

臣そして親幕派諸藩が黙っていないでしょう。必ず内戦になり、そして徳川が勝っても西欧列強に侵略を許す事となります。だから、薩長への恭順が内乱も防ぎ、欧米による侵略も少なくできる最善策と存じます。失礼な発言、ご容赦ください」

臣下として辛い進言に、修理はいたたまれなくなっていた。

この国を救うにはその手しかないか、と慶喜は天を見つめそして感情が暴れて納得できない自分を押さえ込んでいた。

「しかし、そんな事をすると残された兵達はどうなる。

俺が陣頭指揮を執ると言って気合を入れ直した彼等はどうなる。

薩長に踏みにじられて私を恨んで死んでいくではないか！

俺も武士だ。

武士にも情けはある。

彼等を踏みにじる様な主人の裏切りはしたくない。」

「御辛抱下さりませ。多数の部下を死なせる不憫になりましょうが、この国を毛唐に乗っ取られない事の方が大切でございます」

涙ながらも修理は第三者的に冷静に分析するが、当事者の慶喜は腑抜けの様になっていた。

「サッ上様、私の肩にお掴りください。下の舟付場の所まで参りましょう」

それから彼等は喋る事無く、階下の船着き場へ降りて行った。

●

修理の肩を借り階下へ降りていく慶喜は、側近に言った。

「江戸から大坂に来た時に持って参った徳川の馬印や旗、そして金子が気になる。辰五郎親分を舟着き場へ呼んできてくれ。俺の義父さんだよ。」

しばらくして、辰五郎は、自分の娘でもあり慶喜の愛妾でもあるお芳と共に船着き場へ現れた。
「親分、俺は急遽江戸へ帰らなくてはならなくなった。あまりに急なので大事な荷物を持って帰れないから、辰五郎さんに江戸まで運んで頂きたい」
「よろしゅうございやすよ。それじゃアッシ達は後程陸路で上様の大切な品物をお運びいたしやす。そして、ここにお芳を連れてきておりやす。どうかご一緒に連れ帰っておくんなさい」
なんと、やはり見目麗しい女性の力はスゴイ。
場の空気は一瞬で和らいだ。
そして慶喜の顔から少し緊張が離れだした。
辰五郎は経験で、傍に愛する女性が居てくれるだけで、心が穏やかになる事を知っていた。
修理はこうして、長崎で見分した清がイギリスに植民地にされた情けない現実、それを強烈に記憶する彼は、慶喜の説得に成功した。
ただしこの神保修理、帰藩後にまだ薩長をしのぐ徳川幕府の軍事力を顧みず、徳川慶喜・松平容保に東帰・恭順を説いたとして親幕派だらけの会津藩士達に恨まれ、鳥羽伏見の敗因と決めつけられた為、慶応四年二月二十二日に自刃した。

●〔江戸城　無血開城〕

慶応四年一月六日に大坂城から夜逃げの様に密かに脱出した慶喜は、七日に幕府軍艦開陽丸に乗り移り十一日に江戸品川に帰東した。
その間何時もに増して、艦の中は静かだった。
彼は家臣を見捨てなければならなかった我身を呪った。
これ以外に内戦拡大を防ぐ方法は無かったのか、国家消滅を防ぐにはこれ以外ないのか、堂々巡りの煩悩に苛まれていた。